高町亜美の物語

学校嫌い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高町亜美の物語

【Nコード】

N7765Y

【作者名】

学校嫌い

【あらすじ】

黒い穴に吸い込まれ、空に放り出された高町亜美は、落下中にドラゴンと遭遇するが意識を失ってしまふ。次に目を開けた時、高町亜美の目の前にはいたのは 。高町亜美。彼女は異世界で何を成すのか。

初恋

「ひゃあああああああ！」

自由落下を始めて五分程経過しているけど、紐なしバンジーみたいで楽しい。バンジージャンプをしたことがないからいまいち感覚は分からないけど、戻ったらやってみようかな？あとスカイダイビング・・・は今してるからいいや。

バサ！

突然聞こえた、何か羽ばたく様な音のした方を見ると、そこには白くて巨大なドラゴンがいた。正確にはどうか分からないけど、まあ形状からして間違いのないと思う。なんでドラゴンがいるのか、とか思いはしたけど、多分こっつて日本じゃないから、いても可笑しくはないかな、とも思う。

2

はあ・・・やっぱり日本じゃないのか・・・。

それを何となくでも理解すると一気にテンションが下がった。さっきまでの楽しい気分が嘘みたいだ。少しは希望があったんだけどなあ・・・せめて地上が見えてくるまでは、日本だって思っていたかった。街なんかを見れば、どこだか大体の見当は付くと思ったけど、ドラゴンなんて、日本どころか世界のどこにも存在する訳がない。

バサ、とまた羽ばたく音が聞こえて、見ると落下しているあたしを、

さっきのドラゴンが追いかけてきていた。

ここで死ぬのかな？

そう思った途端、一気に恐怖が込みあがってきた。

やだ・・・こんな訳の分からない所で死にたくない・・・。

「たすけて・・・旭・・・」

何の力も持っていないあたしに何ができる訳もなく、唯それを願うことしかできずに。

目尻に浮かんだ涙をどうすることもできずに。

あたしは意識を失った。

何かがあたしを受け止めるのを感じながら

旭と隼の二人とは、転校した小学校で会った。初日にみんなに見ら

れているのを少し恥ずかしく思いながら、自己紹介をして、席に向かうと、後ろには無表情の男の子がいた。

その男の子が旭だった。

話しかけても無視されて、人付き合いが苦手なのかな？と思いながら席に着くと、前に座っていた女の子が小声で、何言っても無視されるから放っておきなよ、と言ってきたけどあたしはそんなことどうでも良かった。

折角席が近くなったんだから、お喋りしたい。

その日からあたしは、ずっと旭に話しかけていた。一週間経っても二週間経っても旭は一度も返事をくれたり、表情を変えてくれたりしなかったけど、一ヶ月位が経った時に、旭の顔を暫くじゅつと見つめていて、笑ったらどんな顔するのかな？と思って、

『ねえ・・・少しは笑おうよ？』

と言うと、旭はどうして、と聞き返してきた。

質問された、ということよりもやっと返事をしてくれたことの方が嬉しくて、あたしははしゃいでいた。そんなあたしを見て、今度は旭から問いかけてきた。

『何がそんなに嬉しいの？』

と。

あたしはその問いに無視されると辛いから、みたいなことを言ったと思う。

そして、また旭は質問に答えてくれてないと言って、あたしは笑った顔が見たいだけ、と答えた。

『・・・・・・・・・・はは』

その時、旭は初めて笑った。

何かおかしな所があったのか、それ以外に何かあったのかは分からないけど、とにかく旭は笑った。

それから旭が笑うことはほっつっつとんど無かったけど、それでも色々話してくれるようになった。

二年生になって、いつだったかは忘れたけど、一人で体育の後片付けをしている雫を見つけて、あたしと旭で手伝って、その時は、まあ関わることは無いだろうな・・・・って思ったけど、次の日に雫の方から来てくれた。

用件は昨日のお礼だったみたいだけど、一度言ってくれたんだからそれで十分だったんだけど・・・・とは思ったけど、多分本人もそれ

が目的だったんじゃないと思う。

それからは雫も加わって、三人でいることが多くなった。流石に修学旅行の時とかは無理だったけど、そういったこと以外では、ほぼ毎日。その過程で、あたしは段々雫に対して抱いている好意が友達に対するそれとは、どこか違うな、と思うようになった。

それが何なのか理解したのは、雫が小学校を卒業した時だった。

明日から雫はこの学校にいないんだって思うと、急に胸が締め付けられた気がして……。

これが好きって感情なんだって、子どもながらも理解できた。

旭は気付いていたみたいだけど、何故か教えてくれなかったんだよね……。それで良かったって思ってるけど。

雫も気が付いていたことにはびっくりしたけど。

ま、その恋が実ることは無かったけど、変わらず一緒にいてくれたから嬉しかった。

その内、誰か別の人を好きになるだろうなあ……。とは思っていたけど、結局今日まで、他の女の子に恋をしたことはなかったな……。

『貴女の初恋が私だっていうことは、私にとっては光栄よ?』

そう言ってくれただけでも嬉しかったから、良かったかな?

そんな雫の初恋は旭だったんだよね・・・どうもあたしは恋愛沙汰に疎い様で、雫が旭に対して抱いていた好意が恋愛感情だとは気付かなかった。

今では、二人ともめでたくカップルになっているけど・・・二人とも同じ場所に飛ばされかな？

あの二人にはずっと一緒にいてもらいたい。

旭なら雫を何があっても守ってくれるだろうから。

でも、もし別々の場所に飛ばされていたら、誰が雫を守ってくれるんだろう？

誰が雫の隣に立つんだろう？

ツンツン・・・と何か、先の尖った様な物につつかれているのを感じて、あたしは落下中に意識を失ったことを思い出して、目を開いた。

「グオオ〜」

目の前には、さっきの白いドラゴンがいて、その蒼い瞳に心配そうな色を浮かべてあたしを見ていた。

契約

『やっと目を覚ましてくれた!』

「え?」

目の前にいた、心配の色を浮かべてあたしを見ていた白いドラゴンに驚く前に、何か声が聞こえてどこから聞こえたのか辺りを見回してみた。

どうやら此処洞窟のみたい。壁には松明や照明と言った光源が無いのに、何故か遠くまで見えるほど明るい。大きさから考えると、ドラゴンの巢か何かかも知れない。

適当に見回して、もう一度ドラゴンに視線を戻そうとしたら、

『どうかした?』

とまた声が聞こえた。

頭の中に・・・直接?

そんな感じだった。

こんな経験はしたこと無いし、するなんて思っただけだから、分からないけど、所謂テレパシーというやつかもしれない。それならあたしに話しかけているのは、目の前のドラゴンってことになるのかも知れないけど・・・どうなんだろう？

「今、あたしに話しかけているのはあなたなの？」

自分で言うのも何だけど、いつになくあたしは真剣になって聞いた。

旭と雫が見たら、多分驚くかも・・・。

『うん。もう大丈夫？』

声が聞こえて、明らかにあたしの質問に答えている回答言葉だったから、声の主はこのドラゴンだと確信できた。

どこか幼さを残すような声をしていて、でも通る声。

外見も手伝ってか、余計に綺麗に見えた。

と、今はそんなことを考えてる場合じゃないか・・・。

「いきなり変なこと聞いてごめん。助けに来てありがとう」

『ううん。ボクがそうしたいからただけ』

「それでも、助けられたことには変わらないから……。それで、どうして、あたしを？」

ドラゴンがどんな生命体なのか、なんてことは分からないけど、漫画なんかでは大抵が強敵として描かれたりしている。

そんなドラゴンがどうして、人間を助けたんだろう？

考えたけど、返ってきたのは

『助けたいと思ったから』

と言う、なんとも表現しがたい言葉だった。

回答として少しずれている気がしたけど、本人がそう思って行動したなら、あたしにとやかく言う筋合いはない……。

「そっか」

『ねえ、貴女の名前は？』

「え？あ、そっか……名乗ってなかったね。あたしは高町亜美」

『アミ……。いい名前』

「ありがとう。あなた？」

そう聞くと、ドラゴンは少しの間黙った。

『・・・わたしに名前はないの』

「・・・・・・・・」

それを聞いても、あたしは不思議と取り乱さなかった。

「白亜あへま」

『え？』

「え？あ・・・何だろう？あなたを見てたら、急に浮かんできたんだけど・・・ごめんね？なんでも ないから気にしないで」

本当に急に、浮かんできて、自分でも戸惑っていた。

『ハクア・・・』

ドラゴンはその単語を噛みしめるように、呟いて、その後も何度か繰り返した。

『わたしと契約して？』

「え？」

多分十回目くらい、ハクア、と呟いた後、ドラゴンは唐突にそう言

った。契約つて言うのがなんなのか、そんなことは分からない。

分からない筈なのに、分かった。

だから

「うん」

あたしは頷いた。

立ち上がり、ドラゴンと向かい合う。

目を閉じて、意識をドラゴンにだけ集中すると、唯でさえ静かだったこの洞窟が余計に静かになったような気がした。感覚が鋭くなっているのか、周りに存在する小さな存在。それがなんなのか分からないけど、それも感じ取ることができる。

『私の御魂は汝と共に』

汝の御魂は我と共に』

「汝の御魂は我と共に

私の御魂は汝と共に」

キン、と甲高い音が聞こえた。

『汝我に名を与えたまえ』

「汝の名はハクア」

『我の名はハクア』

「『我の御魂は汝と共に

汝の御魂は我と共に』」

ゆっくりと目を開きながら、最後の言葉を紡ぐ。

あたしとハクアの立っている場所に何か、複雑な紋様が浮かんだ、
円が浮かんでいた。

例えば、魔法陣くらいしか思い浮かばないけど、多分それに近いもの。

『後はお互いの血を一滴飲めば、儀式は終わり』

人差し指をハクアの前に出して、鉤爪で指先をちよんと突いてもら
うとそこから血が、少し膨らむように出てきた。顔を降ろしてきて、
ハクアは指先を舐めて、こくん、とその大きな喉を鳴らした。

すると、ハクアの体が柔らかい光に包まれて、姿が段々変わってい
った。

小さくなっていき、その姿は少しずつ人間に近づいていった。

光が収まった時、そこには小さな女の子が立っていた。

髪はあたしと同じくらい白くて、身長はあたしより少し高い位。服
装は白いワンピースだけ。

肌は白いけど、不健康な印象は全くない。

少女の姿になったハクアは自分の指先を噛み、あたしの方に突きだ
してきた。

その指先を口に銜えてその血を舐め取り、飲み込む。

ドクン、と心臓が鳴り、体の中が熱くなった。

この後すぐにあたしは意識を失うことを、どうしてか分からないけど、分かっていた。

この先、あたしはこの何も分からない土地で生きていく。

多分・・・いや、きっと元の世界には還れない。

二人にも、もう会えない。

「泣かないで？」

その言葉を最後に、あたしは意識を失った。

旭。

雫。

さよなら

開始

「ん・・・？あ、そっか・・・」

あたしハクアの血を飲んだ後、気を失ったんだっけ？どれくらい寝てたのか、分からないけど・・・ハクアはどこだろう？

洞窟の見える範囲にはいない。

ご飯でも探しに行ってるのかな？そういえば、まだ何も食べてないんだよね・・・帰る途中で吸い込まれたから、お腹も結構空いてただけど、こっちに来てからはそんなこと気にする余裕が無かったし。とりあえず・・・待っておこう。

感覚的に三十分位経った頃、小さな羽ばたき音が聞こえて、見てみるとハクアが姿は少女のまままで背中を広げて飛んできていた。その手には何か鹿の様な生き物を抱えている。

まあ、それは良いけど、大きさがね・・・ハクアの倍はある訳で・・・。

細かいことはいいか。

「あーアミ！やっと起きた！」

あたしの姿を確認したハクアが、嬉しそうにそう言いながら、隣に降り立った。持っていた鹿の様な生物をハクアが降ろすと、ズシンといかにも重そうな音がした。

「やっとって・・・？あたしどれ位寝てたの？」

寝ている間の記憶が無いのは多分当たり前だけど・・・ハクアの言い様からして、一日二日って感じじゃない気がした。

「百年」

「は？」

思わず頓狂な声を出してしまった。

百年？

1000年？

ひゃくねん？

ヒャクネン？

なんか最後の名前みたい。

「いやいや、そうじゃなくて！百年！？嘘でしょ！」

まず前提があり得ない。人間仮に百年寝て過ごしたとしても、その間体は成長するんだから少しは背丈が変わっていても可笑しくない。それなのに、あたしの体は悲しい位気を失う前と同じ。何より、百年も寝ていたなら、その間の栄養はどこから摂取してたんだろう？

「うっん、ホント。でも、さっきはやつとって言ったけど、これは凄いことだよ？」

凄い？

「何が？」

百年寝ていたことが？

うん、まあ、百年寝ていたことはもう認める。

「わたし達ドラゴンの血が人間の体に馴染むには最低でも五百年、長かったらそれこそ何千何万という年月が必要になるのに、たったの百年で馴染んだんだから」

どういうことが聞くと、本来ドラゴンと契約するには相当の鍛錬を積み、肉体的にも精神的にも極限まで鍛えられた者でないとまずできならしい。これはドラゴンの血に耐える為で、それを疎かした場合、口に含んだ瞬間に強烈な拒絶反応が出て、飲み込むことすらできないとか……。

そして、歴史を辿ってもドラゴンと契約した者はたったの三人で、その三人ですら、馴染むのに千年近く掛かったとか……。

それなら、どうしてそんな鍛錬なんかとは無縁だったあたしが耐えられたのか？

その上で、たった百年で血が体に馴染んだのか？

それについてはハクアも分からないらしい。

「何かあるのかも知れないけど、とにかく良かった！」

まあ、いいかな？

そこであたしのお腹が鳴り、空腹を訴えた。

そして、ハクアが持ってきた鹿の様な生物を見ると、何故か食欲が沸いてきた。

「あ、お腹減った？今から焼くからちょっと待っててね？」

「焼く？」

あたしの疑問には答えず、ハクアは鹿……もう鹿でいいや。それを持ち上げ、ひょい、と上空に少し投げて、それに向かって

ゴアアアアア！

炎を吹き付けた。

口から吹いて……。

そして落ちてきた鹿はこんがり焼けていた。

それがまた香ばしい匂いを発していて食欲をそそられる。

「はい、召し上がれ」

「いただきます！」

鹿にかぶりついてどんどん食べていく。そして、あたしの体の倍はあつた鹿は、十分程で全てあたしのお腹の中に収まった。

「いい食べっぷりだね。それだけ食べられるなら、問題はないか」

「……ドラゴンと契約すると、ご飯もそれになるの？」

そう聞くと、ハクアは頷いた。

「あとは、治癒力とか、腕力とか脚力とか、身体能力は全て常人のそれを上回るよ？試しに壁でも殴ってみて？」

ちよんとつつく位でね？とウインクをしてみたハクアにあたしは少しときめいた。

とりあえず、壁に向かって拳をちよんと当てると、

ゴバアツ！！

「え……？」

十メートル位の横穴が開いた。

それから、まずは力の制御をできるようにしなければならぬと分かったので、ハクアに色々教えて貰った。

殴ったり、物を掴む時は、力をこれでもかと言う程緩めて、本当に触れるか触れないか位にしないと木っ端微塵にしてしまうらしい。

「まあ、要は慣れだよ」

えらくアバウトな……。

でも、実際そうか……。

「多分早ければ、明後日には制御できるとそれくらいできると思うから、そしたら世界を回ろっか？アミのことも聞きたいし」

「うん」

早速力の制御の特訓を開始して、予定通り二日後にはできるようになったから外に出ることにした。

洞窟を出て最初に見たのは、地球ではあり得ない程の森林で覆われた大地と、遙か彼方に見えるのに圧倒的な存在感を放つ巨大な山だった。

その景色に見惚れているあたしにハクアは言った。

「 ようこそ、ウルベリアへ 」

開始 (後書き)

亜「ハクア、あたしが寝ている間なにしてたの？」

ハ「アミをつついたり、アミを眺めたり、アミを舐めたりしてた」

亜「最後のはなに？」

ハ「見てたらつい。テへ」

亜「ぐ・・・可愛い／＼／」

ハ「アミ？顔赤いよ？」

亜「なんでも無い！」

ハ「あ！アミ、待ってよ。道分らないでしょ？」

永遠

洞窟は崖の中腹辺りにあつて、ハクアに飛び降りると言われた時、大丈夫なのか心配になったけど、契約してるから大丈夫と軽く言われた。

まあ、確かにそうか・・・。

それでも怖いのは怖いから、ハクアと手を繋いで一緒に飛び降りた。途中何度か木に当たったりもしたけど、どこもけがとかなかった。

凄いな、契約。

「此処は誰も来ないけど、魔物はわんさかいるから、警戒しておいてね?」

「まもの?」

「そ、この前、アミが食べたのも魔物」

ハクアはあたしの手を引っ張って、歩き始め、魔物についての説明を始めた。

この世界・ウルベリアにはマナと言う、地球で言う酸素の様な物質が絶えず循環していて、動物は全てそれを吸収して生きているらし

い。

そのマナを長い間吸収し続けて、他の動物よりも凶暴性が増したり、知性が増したりと表れる症状というか、それは動物によって色々な種類があるらしい。

でも、大部分が凶暴性が増すだけで理性を失って暴れるらしい。

知性が増したりするのはほんの一部だけ。

「魔物の始まりは約五千年前。たった一体から始まった」

そのたった一体の魔物と言うのが、繁殖力の高い生物だったみたいで、瞬く間に増えていったらしい。

最初はその種の魔物しか居なかったのが、異種交配とでも言えばいいのか、それによってどんどん種類が増えていって、気付けば世界には魔物が溢れていたらしい。

「ま、それで滅びたりした訳じゃないけどね？現に今も、ウルベリアは存在している訳だし」

ハクアはそう言って、魔物の話を終えた。

*

三日くらいかけて森を抜けると、人の手が全く入っていない平原があった。

視認できる範囲だけでも結構な数の魔物が居るけど、どの魔物もあつたし達に襲い掛かってきたりしない。

ハクアが言うには、魔物ももとは普通に動物だから、本能があつたたちは危険だと告げているみたいで敵わないことが分かっていゝらしい。

ちなみにハクアと契約した恩恵というか、そういつたものは結構ある。

遠くの方が見えたり、普通なら聞こえないレベルの音が聞こえたり、ほんの少しの匂いも分かつたりと、簡単に言えば、感覚という感覚の全てが、桁外れになっている。

「だから、当分アミの相手はわたしがするから」

「うん。それで、この平原でどこまで続いているの？今の視力でも先がずっと平原なんだけど・・・」

「そりゃそうだよ。普通の人間が此処を抜けようとしたら、どんなに強い人でも一月は掛かるもん」

「一月ね・・・何でだろう？既に百年生きてるからなのか、長いと思わない」

聞いた瞬間、え？ たったそれだけ？ とか思ったもの。

「あはは。時間に対する感覚もわたしたちと同じになるからね。今のアミだったら、千年が一年くらいに感じるかも知れないよ？」

「千年って・・・いくら何でもそこまで寿命は持たないでしょ？」

ドラゴンだけなら、それくらい生きてても可笑しくないとはい思っけど、契約したとは言っても、結局あたしは人間なんだし・・・あれ？ でも、契約して血が馴染むのに千年掛かることもあるって言ってたし、あるのかな？

でも、仮に寝てる間体の時間が止まってるとしたら、生きてるのはむしろ当たり前な訳だし・・・。

「ううん。持つよ？ というか、死なないから」

「・・・・・・は？」

「死なないよ？ アミも、もちろんわたしも」

「え？ どういうこと？」

流石にこれはさらっと聞き流してはいけない。

死なないってことは、要は不死身ってことだし・・・。

「この、死なないって所が、ドラゴンと契約して得ることの出来る最大の恩恵、とでも言えればいいのかな？ わたしたちドラゴンの生命

力は、他のそれとは一線を画しているから」

「でも、それが死なないってことに繋がる訳じゃ無いでしょ?」

「もちろん」

ハクアは歩き始めた。

あたしもそれについていく。

「この前、魔物の話をしたでしょ?」

空を見上げ、後で手を組みながらハクアは聞いてきた。

「うん。約五千年前から始まったって・・・」

「そう。でもね?わたしたちドラゴンはもっと前から、それこそ、ウルベリアが誕生した位大昔から存在してるの」

「それって、どれくらい前から?」

「ざっと数えて八十億年」

「そんなに!?!」

「うん」

地球で言う、恐竜みたいな存在ってことなのかな?

例えが思いつかない。

「でも、その時を全てのドラゴンが生きてる訳じゃなくて、今生きてるのは、わたしを除けばほんの四体だけ。他のドラゴンは、契約者が見つからなくて、寿命で死んじゃったり、老衰して殆どの力を失っていた所を、人間や特別強い力を持つ魔物に殺されたりしてね。気が付けば、たったのそれだけになってた・・・」

顔が見えないから、分からないけど、多分今のハクアは悲しい表情をしていると思う。

「話が逸れたね。」

ドラゴンは元から超長寿の生命体であり、自分が認めた者と契約を結ぶことが出来れば、永遠の命を得るってこと。

未だに、何故そうなるのかは分かってないけどね？」

振り向いたハクアは、いつもと変わらない顔をしていて、悲しんでいた様な気配すら無かった。

「・・・・・・・・」

「もしかして、迷惑だった？」

何も言わないあたしに対して、何を思ったのかハクアは突然そんなことを聞いてきた。

「え？何が？」

「何がって・・・契約したこと。説明も何もしないまま、半ば無理

矢理な気がしたから・・・」

「そんなこと無いよ。唯、ハクアが悲しんでるんじゃないかって思
つて・・・」

「え？・・・あはは、確かに悲しいけど、もう慣れちゃったから・
一人で居た時間が永すぎて。だからって訳じゃ無いけど、そんな
心配はしなくてもいいよ？」

寧ろ今は、迷惑じゃなかったって分かったから、嬉しかったし」

「そっか。良かった」

あたし達はまた手を繋いで、平原を進んだ。

暫く進んだ所で、休憩ついでに空の飛び方を教わることにした。

森を歩いている時に、飛べるってことは聞いたけど、流石に木ばか
りの所を飛ぶのは無謀だろうと思って、先延ばしにしてたんだよね
・・・。

「教えるって言っても、わたしたちにとって、飛ぶことは本能だか
らね。原理がどうこうの話じゃないんだけど」

「でも、あたし本能どころか翼すらないし」

背中に手を伸ばしてみても、それらしき物がある感じはしない。

「背中に思いつきり力を入れてみて？」

「え？どうして？」

「いいから」

「？うん」

分からないけど、とりあえず言われたとおりに行ってみる。

「ふっ！」

バサ！

「え？」

力を入れた瞬間そんな音が聞こえて、首を九十度横に向けて見てみると、そこには白い翼があった。

間違いないあたしの背中から出てるんだろうけど、痛みとかが全くないのはどうしてだろう？

聞いてみると、

「どんな傷も一瞬で治るからね。服は直らないけど」

とのこと。

まあ、確かに翼の音が大きかったけど、勢いもそれだけあった訳で、

制服は見事に破れた。

「一度出すのに成功すれば、後は出し入れ自由だから。試しに引っ込めてみて？」

「えつと・・・こう？」

広がった翼を、少しずつ小さくしていく感じで、畳んでいくとまた背中には何もない状態になった。

穴が空いた所が少しスースーする。

「そうそう。それじゃ、練習を始めるから、もう一度翼を出して？あ、力は軽く入れるだけでいいよ？」

「うん。んしょ」

ハクアの言ったとおり、今度はほんの少し力を入れるだけで、翼が出た。

「最初はわたしと手を繋いで、飛んで、少しずつ慣れていこうか？」

「うん」

「はい」

翼を広げながら、ハクアは手を差し出してきた。

あたしはその手を取る。

「行くよ?」

「うん」

手を繋いで、あたし達は空へと舞い上がった

永遠（後書き）

亜「それにしても、不死身かあゝ・・・ハクア、暇じゃなかったの？」

ハ「暇だったけど、人間は色々新しい物を造るからね。それを見ているのは楽しかったよ。後は、偶に仲間とも会ってたし」

亜「どんなドラゴンなの？ハクアの仲間って」

ハ「年中百％天然な娘に、どんな時どんな状況でも寝られる娘ですよ。それから、とにかく遺跡巡りが好きな娘と、海でひたすら海獣と戦ってる娘」

亜「へゝ・・・面白そうな人達だね？」

ハ「うん！きっと仲良しになるよ？」

亜「だと良いけど」

登録

飛行練習を始めて、約五時間が経ち結構飛べるようになった。

ついでにこのまま平原の先にある街まで飛んでいこうと言うことになった。

この世界には魔法があつて、その中に飛行魔法はあるらしいけど、それは・・・というか、魔法全般において、使用するにはある程度の才能と内包している魔力が必要だそうで、使える人の中でも個人差が大きいらしい。

魔力の量は、十五年、つまりこの世界で、成人となる年になるまでに呼吸して取り込んだマナをどれだけ留めることが出来たかで決まるとか。

大体の人は火の初級魔法であるファイアボールや水の初級魔法であるアクアボールは使えるらしい。

全く使えない人の方が珍しいとかなんとか・・・。

「でも、今アミがやっている飛行は魔法とか関係ないよ？これも恩恵だからね」

なんとなくそうじゃないかな、とは思っていた。

翼を出した時も、飛び上がった時も、飛んでいる今も、その魔力とやらを使っている様な感じはしない。

そもそもあたしに魔力があるのかどうかも分からないけど。

街が見えてきた所で、近辺に人が居ないのを確かめて街道に降りる。

「誰かに見られたら面倒だからね。誤魔化せば良いけど、見破る人もいるから」

「そんなこと出来るの？」

「うん。て、凄く今更なんだけどさ・・・アミ、色々知らなすぎじゃない？」

「当たり前だよ。この世界の人間じゃないもん」

「・・・へへ・・・へへ？」

言つとハクアは、きよとんとした顔をした。

可愛いな。

*

「つまり、そのちきゅう、っていう世界のがっこうって所に通って、幼馴染みの二人と帰っていたら、黒い穴に吸い込まれて」

「飛ばされた。正確には落とされたのかな？それがここ、ウルベリアだったってこと」

とりあえず、街道から見えていた街。

ニューアージュの宿で部屋を取って（お金はハクアが持ってた）、そこでこっちにきた経緯を話した。

といっても、ハクアが繰り返したことを少し詳しく話ただけなんだけど……。

「だから空中に居たんだね？」

「そういうこと。最初はスカイダイビングみたいで楽しいと思ったけど、ハクアを見て、地球じゃないってことを認識したら、急にテンションが下がったんだよね……」

「……」

「まあ、ハクアがあするとき、あそこを飛んでなかったら、あたしはそこで終わってたけど。」

だから、ありがとうね？助けてくれて」

「アミ……。うん！」

話はそこで一旦終わりにして、次はこの世界の通貨について教えて

もらった。

銅貨・銀貨・金貨・白金貨。

銅板・銀板・金板。

銅貨が日本で言う百円分。

銅貨五十枚で銅板一枚、五千円分と交換出来る。

銀貨が一枚一万円。

これも五十枚で銀板一枚、五十万円分と交換可能。

金貨は一枚百万円。

これは十枚で金板一枚、一千万円分と交換可能。

白金貨は一気に跳ね上がって、一枚一億円に当たるらしい。

これは板が無いそうで、交換不可。

「でも、白金貨なんて、殆ど貴族とか王族とかにしか縁が無いけどね？」

それはそうだろう。

一億円なんて額がおいそれと出回る訳がない。

宝くじの様な物でもあれば別だろうけど。

「ついでだから、ギルドについても話そうか」

「ギルド？」

「うん。依頼とか魔物の討伐とか受けて、報酬としてお金やアイテムを貰うところ。十二歳以上で二人以上なら誰でも登録できるよ？」

二人以上と言うのは、危険を最小限に減らす為の、本部の措置らしい。

魔物の討伐の中には、一人では到底倒せない魔物も居るらしくて、もし戦闘中どちらかが死んでしまう様なことになったら、残った方が助けを呼ぶか、逃げる事が出来るようにしているとか。

。「死なずに二人とも帰還……ていうのが一番良いんだけどね……」

命が無いと、人は何も出来無いどころか、しようと思うことすら出来ないから」

「確かにね……」

ギルドのことは分かった。

それで、疑問なんだけど、あたしとハクアは死なないんでしょ？それって、寿命で死なないってこと？心臓を抉られたりしたら、死ぬの？」

我ながら例えがぐるいな、とも思ったけどこれは知っておかないとだめなことだろう。

「死なないよ？文字通り死なない。死ねないって言ってもいいかな？

例えば心臓が抉り出されても、一時的に永い眠りに着くだけで、次に起きた時には心臓は再生してる。

他の臓器も部位も同様に」

ただしそれは契約者のみ。

ハクアは最後にそう言った。

*

ギルドに登録していれば、通行証替わりとかにもなるからってことで、登録することにして、とりあえずこの街にあるギルドに来たけど、入った途端周りの人から変な視線を向けられた。

無視して受付に行き、登録しに来たことを伝えると、紙を渡されて名前と年齢、それからスキルと言う欄があった。

「ハクア、スキルって？」

「その人が持つてる特技みたいな物だよ。詳細は説明するよりも、自分で見て確かめた方がいいから、まずは持って行こう？」

「うん」

とりあえず空欄のまま、名前と年齢だけを書いて、また受付に行つて紙を渡した。

「確認させて……え？」

紙を見た途端、受付のお姉さんが固まった。

でも、すぐに元に戻って年齢が間違っていますよ、と言ってきた。

紙が返ってきて、確認する。

でも間違っていない。

ちゃんと百十六と書いてある。

ハクアの方も間違つて居ないみたい。

「あの、これで合ってますよ？」

「え？でも、百十六って」

「はい。あたし百十六歳です」

「え？ええ……」

お姉さんは、混乱してしまった様で少々お待ちを、と言って奥に消えた。

五分ほどして、こここの理事長かなにかなのか、白髪の厳ついおじさんと一緒に戻ってきた。

目が鋭すぎ……。

「お前達か？これを書いたのは？」

おじさんが見せてきたのは、さっきあたしとハクアが書いた紙だった。

同時に頷く。

「大人をからかうもんじゃない。見栄を張る必要なんてねえんだから、本当の年齢を書け。こっちも仕事だからな」

「だから、本当の年齢を書いてるんですけど？大体年齢で嘘付く必要なんか無いじゃないですか」

「そうですね」

「だから、嘘はつくなと言っている」

「ついてません。本当に百十六歳なんです」

「んなわけあるか。自分の姿ちゃんと見たことあるか？」

「ありますよ。毎朝見てましたよ。歯磨きするんですから」

「それなら、どう考えても百十六なんてのがあり得ないことは分か
つてるだろ？」

「分かってますよ。でも本当なんです。なんなら確かめてみて下さ
いよ？」

「はあ・・・分かった。奥に來い」

折れないあたしに折れたのか、おじさんにそう言われて、あたしと
ハクアは奥についていった。

通されたのは、大きな部屋でそのソファに並んで座り、正面には
おじさんが座っている。

「たく・・・ガキの冗談に付き合ってる暇なんか無いんだけどな・・・
」

溜息をついてそついうおじさん。

「いいから、早く確かめて下さいよ？」

「分かった分かった。オレの目を見る」

言われておじさんの目を睨む。

「睨むな」

「睨んでません。これが普通です」

「はあ・・・いいか？反らすなよ？」

「・・・」

何も言わず睨み続ける。

すると、おじさんの目に何か紋様の様な物が浮き上がってきた。

少し驚いたけど、そのまま睨んでおく。

「！」

おじさんの目が急に見開かれてビックリした。

「アミ、そんなに驚かなくていいよ？これで分かりましたよね？」

「あ、ああ・・・悪かった」

まあ、その後、手続きを済ませて、無事ギルドカードを発行してもらえた。

本人が持って、念じれば表示を出したり消したり出来るらしい。

便利なこと。

「それじゃ、スキル欄を見てみて？念じればいいよ？」

「うん」

手に持って、念じてみると、多分表に名前と年齢が表示されて、中央辺りに大きくDと出た。

これは後で説明して貰おうとして、カードを裏返す。

『契約者』

裏にはそれだけ書かれていた。

登録（後書き）

亜「全く・・・あのおじさんは、しつこいんだから」

八「まあまあ。いいじゃない、分かってくれたんだから」

亜「まあね？それで、おじさんが使ったのがスキル？」

八「そ。街に入る前に言ってた、見破るスキル。敵の弱点とか、能力値とか色々分かる結構便利なスキル」

亜「へ〜・・・まあ、追々知っていけばいいかな？」

八「うん。時間は本当にいくらでもあるからね」

亜「そうだね。色々教えてね？」

八「もちろん」

魔法 (前書き)

八「今回は初クエストに行つて帰ってくるまでの話だつて」

亜「ちゃんと纏められるの？」

八「それは作者次第」

魔法

契約者。

ハクアによると、この言葉はあたしの様にドラゴンと契約した者の他に、精霊や魔具と契約している人たちも纏めてそう呼ぶらしい。

精霊はマナが一か所に集まり、そのまま長い年月が経つと生まれる、意思を持ったマナで、容姿も性別もちゃんとあるらしい。

マナが集まった場所によって、その精霊の属性もかわるとか。

魔具と言うのは、所謂曰く付きの道具のことで、呪いが掛けられていたり、意思を持っていたりする道具のことの総称らしい。

精霊も魔具も契約すれば、ドラゴンとの契約と同じようにいくらかの恩恵があるみたいだけど、それは個々で全く別の形として現れるそう、どんな恩恵が得られるのかはするまで分からない。

お楽しみ、みたいなものだろう。

契約者と言う一単語で表すのは、それを周囲の人が知った時に起こる混乱を防ぐ為。

ドラゴンとの契約者は今の時代ではあたし含め四人。

この前教えてもらった、三人の契約者。

その三人もあたしと同じように不死になってるからね……。

「ここにはそれしか書かれていないけど、詳しく知りたいならもう少し強く念じてみて？」

言われた通り念じてみると、頭の中にいろんな情報が入ってきた。

一つ目は『千里眼』

遠くを見渡す眼を持っているものが得るスキル。

強化不可。

強化についてはまた聞こうと思って、次に項目を見る。

『地獄耳』

意識して聞くことで、どれだけ小さな音も聞き分ける。

強化可能。

現段階レベル・1

『絶対嗅覚』

無害か有害かを嗅ぎ分けることができる。

強化可能。

現段階レベル：1

『リュウメイリン
龍燐』

任意により体を龍の鱗で覆うことができる。

強化可能。

現段階レベル：1

『気配感知』

半径一キロ内にいる気配を消している者の気配を感じ取る。

強化可能。

現段階レベル：1

他にも気配遮断とか結界破りとかあるけど、ざっと見ただけでも四

十個くらいはある。

「分かった？」

「うん。結構色々あった。それで、強化についてなんだけど」

「とりあえず何かクエスト受けない？そこに向かいながら教えるから」

「うん」

確かに止まって教えてもらうよりは、行動しながらの方がいいか。

*

「強化っていうのは、そのスキルを使うことで、効果が上がったりすることだよ。」

さつき、ギルドの人が使ってスキルは、使い込むことで人の年齢や魔力量を量ることもできるようになったり、結界の綻びを見破ったりできるようになるの。

魔法もこれに該当するけど、アミのスキルに何か魔法はあった？」

アカウサギ
朱兎と言う魔物の討伐依頼を受けて、その魔物が主に生息している

ラパ森林に向かっている。

その途中で、スキルの強化について解説をもらっている。

「うん。二つあったよ」

「え？二つだけ？」

「うん。一つは至って普通の魔法なのかもしれないけど、もう一つがかなり物騒なこと書いてあったんだよね・・・ちよつと見てみて？」

カードのその魔法の名前と説明を表示してハクアに渡す。

「どれどれ？・・・え!？」

それを見た途端、ハクアは驚いたのか固まった。

本日二回目の硬直。

とりあえず元に戻るまで、ハクアを引っ張っていくことにした。

三十分位して、元に戻ったハクアに説明を求める。

「えつと・・・わたしもまだ少し混乱してるんだけど・・・」

「ん？」

「この『ル・ノワール・ファン』って言う魔法はね？現存する魔法と歴史に残る魔法。」

それら全ての魔法の頂点なの。

最強で最凶で禁断の魔法。

意味は『漆黒の終焉』」

終焉。

あれかな？

物語の終わりによく使われる、FINで言葉のことなのかな？

正確な発音ってファンだったのかな？

まあ、いいか。

「この魔法の効果は、『無』。」

ただそれだけ。

でも、それだけだから危険なの」

ハクアの声がいつになく真剣な物になっている。

「この魔法を受けた者及び物は、その存在の一切がこの世界から抹消される。親や友人、仲間。記録といった物から、全てが抹消され初めからいなかったことになる。」

だから、禁断とされた。危険、なんて生易しい言葉で片付けられる

魔法じゃないから・・・」

*

「レクレール」

唱えると翳した手から閃光がはしり朱兎を焼いた。

「終わりつと・・・」

焼けた朱兎から角を採って、依頼達成。

ル・ノワール・ファンの他にあつた魔法、レクレール。

これは光属性の魔法の中では初級中の初級で、しかも全ての魔法の中で一番威力が低いらしい。

でも、魔法の威力は使用者の魔力に左右されるし、強化もできるから何も問題はない。

今ので朱兎くらいの魔物なら倒せるってことも分かったし。

「でも、普通ここまで威力は出ないんだけど・・・」

ハクアはそう言っていたけど、あたしも魔法なんて物は生まれて初

めて使ったからね。

ついでに補足としてだけど、魔法は使う際に強くイメージをして使うと威力が上がったりするらしい。

他にも形を変えたり、軌道を変えたり、時間差で発動できたりとか。

「さて、帰ろうか？」

「うん」

袋に角を入れて、歩いて帰るのも疲れるから飛んで帰ることにした。

スキル全然使っていないな……。

*

「確かに。こちらが報酬となります」

「「ありがとうございます」」

銅貨十枚を二人で五枚に分ける。

「これで依頼のことは分かったよね？」

「うん。あ、そういえばこの『D』ってなに？」

「ランクだよ。今わたしたちは一番したのDランク。依頼をこなしていけば勝手にポイントが加算されて、一定のポイントが貯まったら、勝手に上がって行って表示も変わるから、余り気にしなくていいよ？ちなみに最高ランクはS」

「そつか。それじゃ、宿に帰ろう？お風呂入りたい」

「うん」

「それじゃ、お姉さん。またよろしくお願いしますね？」

「え？あ、ええ！もちろん、またね？」

お姉さんに手を振って、ギルドを出て、あたしたちは宿に戻った。

お姉さん、嬉しそうだったけど、何かいいことあったのかな？

まあ、いいか。

お風呂、お風呂。

魔法（後書き）

亜「魔法とか街の名前って、どこかの言葉なの？」

作「フランス語だけど？」

亜「なんで、そこ選んだの？」

作「なんかフランス語って格好良く聞こえるじゃん？」

亜「まあ・・・分からないでもないけど・・・。それで？今回あたしが使ったレクレールってどんな意味？」

作「閃光って意味らしいよ？ル・ノワール・ファンは漆黒と終焉って言葉を合わせてみた」

亜「へ〜。じゃあ、お風呂はなんて言うの？」

作「アンバン、だってさ」

亜「アンバンねえ・・・まあ、いいか。それじゃね？」

作「あいよ〜」

復習（前書き）

亜「今回は特に何も起こらずに、ずっと説明だったさ」

ハ「また？多すぎない？」

亜「だから、今回の話で纏めて、次話は一気に十年後まで行くついでしょ？」

作「ああ。ちまちま説明し過ぎたし・・・まあ、とりあえず今回で第一章は終わりってことだ」

亜「まあ、何でもいいけどね」

復習

宿のお風呂で体の疲れを取りながら、あたしはここまで聞いた話を復習することにした。

まず、この世界は地球ではなく、名前はウルベリア。

魔物も魔法もドラゴンも存在する。

人間もちろんいる。

そして、今日、ギルドの中をざっと見た時、耳がある人やしっぽがある人もいたから、多分種族というかそれが違う人たちもいる。

世界にはマナと言う酸素の様な物が循環していて、生物は全てそのマナを吸収して生きている。

そのマナを十五年の間にどれだけ取り込んだかによって、魔力量が決まる。

魔物はそのマナを長い間吸収し続けた生物が凶暴性を増したものの。

形は様々で、でも殆どが凶暴性を増すだけ。

そして稀に知性の高い魔物が生まれる。

現在、ウルベリアにいる魔物は全て、約五千年前に生まれたたった

一体の魔物から始まった。

次に魔法。

この世界の殆どの人が使えるけど、偶に使えない人もいる。

魔法の威力は内包している魔力によって変わる。

発動する際、よりハッキリとイメージを描けばそれを魔法に付加することができる。

形の変化の他に、あたしが使うレクレールなら軌道を変えたり。

発動時間をずらしたり。

そして、あたしが使えるもう一つの魔法。

ル・ノワール・ファン。

意味は漆黒の終焉。

効果は、対象の存在をこの世の全てから抹消するという物。

記憶・記録の全てから。

最強で最凶で禁断とされる魔法。

さっきハクアが言っていたけど、魔法は鍛錬を積み習得できるら

しい。

他にも魔導書や人に教えてもらったりとかしても……。

次にギルドとスキル。

ギルドは二人以上で登録して、その際にギルドカードを受け取る。

そして、依頼を達成することでお金やアイテムをもらうことができる。

依頼を達成していくと、カードにポイントが貯まって行き、一定値に達したら勝手にランクが上がっていく。

今、あたしとハクアは最低ランクのDで、最高はS。

カードの表には名前とランクが表示され、裏にはその人が持つスキルが表示される。

どちらも任意によって一部だけを表示したり非表示にすることができる。

最後に契約者。

これもあたしが持つスキルの一つ。

ドラゴン・精霊・魔具。

だれか、またはどれかと契約した物が得るスキル。

このスキルに効果と呼べる物はない。

強いて言うならスキルを得る為のスキルだろう。

千里眼や地獄耳、絶対嗅覚。

そして龍焔は多分、契約者から得た物。

「ざっとこんな所かな・・・」

簡単にだけど、自分なりに纏めていれば思い出すのも楽だろう。

「ハクア・・・あたし以外の契約者って今も生きてるんだよね？」

「うん。そうだけど・・・どうかしたの？」

「ううん。単にどこに住んでるのかな・・・って思って」

契約しているってことは、あたしたち同様に死なないんだろうから、今もどこかで暮らしているんだろうなって思ったけど・・・どんな所に住んでるんだろう？

「説明ができる場所じゃないね・・・。地図にも載ってないし、仮にその場所にたどり着いたとしても、家を見つけることはできない

よ。

同族か同族と契約した者にしか感知できないから」

「そうなんだ。でも、あたし何も感じないよ?」

「それは単に近くにいないからだよ。世界を回っていれば、その内見つけれらるって」

「それもそっか……。それじゃ、上がるっか?のぼせちゃうし」

「うん」

お風呂から上がって、体を拭き着替えようとして服がないことに気付いた。

買っておくべきだったか……。

と思ったけど、予備の為なのか、着物の様な物がタオルと一緒に置かれていた。

なんであるんだろう?

「まあ、いいか。ハクア、帯結んで?」

「はいはい。次はわたしもよろしくね?」

「うん」

あたしの着物は赤い布地に花の刺繍が施されている物で、ハクアの方は黒い布地に水玉模様が入っている物。

「よく似合ってる」

「そう？アミも似合ってるよ？」

「そうかな？」

着物なんて向こうにいた頃は殆ど着たことないし、それだってうんと小さな頃だったから、あたしは全然覚えてないんだよね……。

写真で見たことはあるけど、似合っているとは思わなかった。

その後、バイキング方式の夕食を食べて歯を磨き、同じベッドに二人並んで寝転がった。

「明日あたり、装備を揃えようか？この着物だっけとずっと着てる訳にはいかないし」

「そうだね。いくら譲ってくれたからって、ずっとは無理だし」

女将さんが、よく似合っているから譲るわ、と言ってくれたので好意に甘えてもらうことにしたけど、成長したらサイズが合わなくなるだろうし……。

（成長すればね？）

「は!?!」

「っ!?!どうしたの?アミ」

「あ、いやなんでもない。ごめんね?」

なんか不穏な発言が聞こえて声を上げると、ハクアを驚かせてしまった。

「それないけど……。じゃあ、お休み。アミ」

「うん。お休み。ハクア」

目を閉じると、すぐに睡魔が襲ってきて、すんなりと眠ることができた。

明日からも頑張って行きましょっかね。

復習（後書き）

亜「それで？どういふこと？」

ハ「どうしたの？アミ」

亜「こいつが不穏なこと言ったの！成長しないような感じのことを！で？どうなの！」

作「さうて。どうく」心配しなくても、ちゃんと成長するよ？」「ちよ！ハクア！」

ハ「なに？本当のことだよ？」

亜「良かった〜・・・」

作「チツ」

亜「今舌打ちしたでしょ？」

作「いや？」

ハ「まあ、いいじゃない。それじゃ、次は十年後です！」

作「あ、勝手に終わられた！」

亜「へへ〜ん。ざまあみるおー！」

作「なんだと！」

亜「やるか!？」

八「勝てないと思うけどなあ・・・作者。まあ、いいか」

魔具（前書き）

亜「十年ってこんなに早かったっけ？」

作「契約したからだろ？こっちでは一日も経っていないって」

亜「いや、あんたのこの時間経過なんてどうでもいいよ」

作「冷た」

ハ「あはは。まあ、作者の言うとおり、契約したから時間の感じ方が変わったんだよ。人間と同じように時間を感じてたら、とっくに生きるのに飽きてたと思うよ？」

亜「確かにそうだよね……。これなら百年とかも一瞬なのかな？」

ハ「そうかもね。でも、そんなの気にする必要はないし、気ままに行こうよ？」

亜「うん」

魔具

「ありがとうございます。お待たせ、ハクア」

「ううん。こっちもついさっき終わったし。それで、この後どうする？」

ウルベリアに着て十年の月日が流れた。

あっという間だったし、色々あったな……。

とまあ、感傷に浸るのは止めておいて、今日はギルドで健康診断が行われた。

五年以上同じ街に止まって活動している人は、その街のギルドで健康診断を受けないといけなかったらしい。

ハクアもこれは知らなかった見たんだよね……。

というか、なんの説明もされなかったし。

診断結果は至って健康とのことだった。

身長は百五十八？まで伸びて、体重も丁度いいくらいだったし、良かった良かった。

髪も結構伸びて、腰の下まで来たからツインテールにしている。

和服にツインテールってどうなんだろう？

ハクアは似合ってるって言うてくれたから良いけど。

着物は、もらった次の日に女将さんから聞いて分かったけど、魔具だったんだよね……。

保持者の成長に合わせて自動的にサイズも変わっていくっていう物で、女将さんが人様に上げるんだから危険がないか確認しておかないと、と言つてギルドのおじさんと同じ見破るスキルを使って視た所、魔具だということが発覚した。

契約をしなくても着ることはできるけど、折角だから契約した。

ちゃんと翼用の穴も開けている。

「とりあえず何かクエスト受けよう？Bランクになってるから、大体の物は受けられるし、街にいても暇だし」

「そうだね。黒獣コクシュウでも行こうか？」

「オツケー」

ハクアも背が伸びて、あたしより大きくなった。

と言つてもほんの二三？だけど……その差が結構大きいんだよねえ……。

髪型はお下げ？

二つに分けて前に持ってきた髪を、首もと当たりで結んでいるんだけど、風呂上がりの格好にしか見えないし、桶とかもってたらそうにしか見えないと思う。

ちなみに武器についてだけど、あたしは『妖刀・ムラマサ』でハクアは『靈銃・ル・フユズイ』ていうんだけど、これまたどちらも魔具なんだよね……。

契約もばっちりしております。

加えて、二人とも自我を持つてるんだよね……。

それは良いんだけどね……

『おいアミ！黒獣なんてまだお前には早い！もっと安全な奴にしとけ！あ、いや！それもやっぱり駄目だ！採取にしておけ！それなら命の危険はないからな！正し断崖絶壁の場所とかは止めるよ！落ちたら危ねえからな！』

この心配性はいい加減にして欲しいな……。

ちなみに男です。

『ムラマサはん？アミはんもハクアはんも強うなってますさかい、黒獣くらいなら問題ありません。それに、既に何度か倒していらっしやいますやる？』

こっちは女で、正しいのかどうか分からないけど関西弁、多分京都より？で話す。

初めて会った時も思ったけど、この二人って武器が逆の方がしっくり来てると思うんだよね・・・まあ何となくだけ。

「そうだよ。それに、二人ともわたしたちの正体知ってるんだから、問題ないこと位分かってるでしょ？」

『それはそうだけどな？やっぱ心配なもんは心配なんだよ』

「心配してくれるのは嬉しいけど、されすぎると疲れるの。あたしそんなに信用しないの？」

『あ・・・いや・・・』

少ししょげてしまったのか、ついさっきまであった勢いが無くなった。

鞘ごと腰から抜いて、抱きしめる様にムラマサを持つ。

「誓ったでしょ？あなたの契約者として恥じない様になるって」

『アミ・・・そうだな。悪かった』

「ううん。あたしもごめんね？心配してくれたのに」

『ああ』

心配してくれるのは、それだけあたしのことを思ってくれているからだってことは十分分かってる。

八年前に契約した瞬間から、ムラマサはあたしの心配をしていたし、それからずっと心配しないことがなかったから。

心の中でもう一度お礼を言って、ムラマサを腰に戻す。

『羨ましいどすなあ・・・ハクアはん？うちも抱きしめておくれやす』

「うん」

膝に置いていたフユズイを抱きしめるハクア。

頬笑ましいなあ・・・。

『あ、そうだ。アミ、黒獣と戦うのもいいが、その前にウォーミングアップくらいしておいたらどうだ？念には念を入れてよ』

「それもそうだね。ハクア、フユズイ？そういう訳だから、よろしく」

「うん」

『ええ』

*

ニューアージュを出て、誰にも迷惑がからない場所でムラマサの柄

に左手を添え、フユズイを構えているハクアと向かい合う。

やることは至って単純。

ハクアが撃ってきた魔弾を居合いで斬る。

それだけ。

放たれた魔弾が眼前まで迫った所で、全身の力を一瞬抜いてムラマサを振り抜きまた鞘に戻す。

鍛錬とハクアとの契約の恩恵もあるお陰で、八年でここまでできる様になった。

「ふうー・・・」

ゆっくり息を吐いて、体の緊張を解いていく。

「よし。終了。行くつか？」

『おっ』

「うん」

『ええ』

「さて、黒獣討伐へレッツゴー！」

「『おー！』」

魔具（後書き）

ム「よう！初めましてだな！アミと契約した魔具。『妖刀・ムラマサ』だ！んでこつちが！」

フユ「ハクアはんと契約した、『靈銃・ル・フユズイ』どす」

ム「本編の中じゃ、武器だが、ここでは人の姿だ。俺もフユズイもアミ、ハクアと同じく和服だ。フユズイは白い布地に、朱で模様が入ってた。髪も朱だぜ？目の色は、いつも閉じてるから分からねえ……」

フユ「閉じてません。これでもちゃんと開いています」

ム「マジか？」

フユ「マジどす。さて、そろそろ戻りませんと、二人とも戻ってきますえ？」

ム「別にバレてもいいと思うけどな……ああ、分かってるよ。でも、あの二人なら本当にいいとも思ってた。お前だってそうだろう？」

フユ「それは……」

ム「まあ……これまでのことを考えたら難しいと思うけどな？」

フユ「……」

最期（前書き）

亜「今回あまり出番ないの？」

作「いや、ちゃんと出るよ？語りが別の奴になっただけで」

亜「別の奴って？ハクア？ムラマサ？フユズイ？」

作「見ていれば何となく分かってくるよ。というかすぐに分かる」

亜「？」

最期

ニューアージュという街の近くに棲み着くようになり、五年の時が過ぎた。

今まで何度か、我を倒そうと挑んできた者がいたが、どいつもこいつもまるで話にならない様な奴らだった。

最初は少し遊んでやろうと力を抜いていれば、いい気になるが、ほんの少し力を入れて掛ければなんのことはない。

一瞬で片が付く。

本当につまらない・・・何故我はこんな所に来たのだろうか？

退屈ならばどこか別の場所に行けば良いだけのことだが、どうしてか此処を動けずにいる。

まるで本能が此処にいろとでも言っているかのように、我はこの地から動けずにいる。

何だと言うのだろうか？

漆黒の毛に覆われた体の毛繕いをしながら、その理由を考えていたが、しかし答えは見つからなかった。

当然と言えば当然か。

三年前からこのことについて考えない日はなかったが、答えは見つかっていないのだ。

それが突然今日見つかるわけもない……。

その時だった。

縄張りに二人の人間が踏み込んできたのは。

まだ私の元までは来ていないようだが、気配だけでも強者だということに分かる。

真っ直ぐに進んでくればほんの三十分程で辿り着くだろう。

念のためにも準備だけはしておこう。

今までの相手が弱かったからと言って、今日も弱い奴が来るとは限らない。

四本の足で体を起こし、固まっていた体を解す。

この瞬間は何とも言えぬ快感があるな。

適当に当たりの魔物を狩りながら、二つの気配が近づいてくるのを感じ、先ほどいた場所に戻った。

それから約十分程が経った頃、その二つの気配は姿を現したが、その二人を見て我は些か驚いた。

「いた」

「アミ？気を抜いたら駄目だよ？」

二人ともまだ年端もいかぬ少女だったのだ。

身の丈は我と比べれば、あちらからしたらおよそ三倍はある頃に、真っ直ぐに我を見据えている。

こんな者たちは初めてだ。

おそらく他の人間達が見れば、この二人の持つ力には気付かないだろう。

黒い着物を着ている少女の、気を抜くなと言つ言葉。

これは我にも当て嵌まる。

この二人には本気で掛からねばならぬ。

本能がそう告げている。

「分かつてる。行くよ？ムラマサ」

もう一人の赤い着物を着ている少女が、腰に差している剣の柄に手

を掛け戦闘態勢を取った。

黒衣着物の少女も太股に巻いているホルスターから銃を抜き銃口をこちらに向け、牽制の弾を撃ってきた。

それを避け今度はこちらから攻撃を仕掛ける。

二人に急接近しその身を引き裂こうと爪を振り下ろすが、それは躲かれ地面を抉るだけに終わった。

だが、こちらも躲されたままで終わるつもりはない。

前脚を軸に体を回転され、尻尾を降る。

「アミ!?」

「大丈夫!」

アミと呼ばれた少女がそう言った通り、尻尾は片腕に防がれた。

だが、勢いを殺すことはできなかった様で、少女の体は地面に叩きつけられた。

それにしても、何だ?今の感触は?

とても少女が持つ固さとは思えなかった。

どころかあの腕で殴られてもすれば、我とて致命傷を覚悟せねばならぬ程だ。

土煙が晴れた時、そこには今し方吹き飛ばした少女が立っていた。
まるで堪えてないようだ。

「居合い術一式・一ノ型」

少女が最初の時の様に柄に手を掛ける。

来る。

「カゲロウ
陽炎」

ヒュヒュン！

空を切る音が二度聞こえた次の瞬間、我は本能的に跳躍していた。

何故だ？

あの者の攻撃は届かない位置にいた。

剣の届く範囲にいなかったにも関わらず、何故我は跳んだ？

ズシン！

背後で音を立てて何かが倒れた。

見てみると、我の後にあった木がスッパリと切られていた。

だが、可笑しい。

音からして、あの者が二発の斬撃を放ったのは明らかだ。

だというのに、木は一度しか切られていない。

その答えは、直後に分かった。

「ガアッ！」

腹のあたりを何かか斬り裂いたことによって。

時間差で二発目の斬撃が襲ってきたのだ。

なんとか地面に降り立つが、横腹からは血が溢れ、ふらついてしま
う。

この瞬間、決着は着いた様な物だ。

だが、このまま終わっては余りにも呆気ない。

せめて最後の足掻きはさせてもらおう。

力を振り絞り、アミと言う少女に接近する。

その時、また少女が剣を構えた。

「居合い術一式・奥義」

おそらくこの一撃で我は終わるだろう。

だが、構わない。

我がこの場を動けなかった理由。

それがこの者だったのだから。

「ミカイユウ
未開紅！」

音も聞こえぬ程の早さで、少女は剣を振り鞘に戻した。

斬られたと言つ感覚すらも・・・我には無かった。

攻撃しようと振り上げていた爪をゆっくりと下ろし、少女を素通りし、後を見ると少女も同じようにこちらを見ていた。

そして

キン

刀身が全て鞘に収まった時、我は終わったと同時に願った。

この者の側にいたい、と

最期（後書き）

八「出番が全然無かった」

作「いや、ごめん・・・次からはまた出番あるからさ、そう落ち込
むなって」

八「本当？」

作「本当だよ」

八「なら許す」

作「サンキュ」

予感（前書き）

ハ「今回はどんな話？」

作「適当にブラブラする話。後は、もしかしたらなにかハプニングに巻き込まれるかも知れない様な気がする」

亜「アバウト過ぎでしょ」

作「和服で刀持ってて、ツインテールって可笑しくね？」

亜「しろって言ったのあんたじゃん！」

作「そうだけどさ・・・やっぱ・・・なんかミスマッチな気がしてさ」

亜「分かってるよ！だから嫌だったよ！」

ハ「それって、単に戦う時もその髪型だからじゃない？」

亜・作「？」

ハ「だから、戦う時は気分を変えるっていうか、戦闘モードっていうか、髪型を変えればおかしくないんじゃない？」

作「あゝ・・・じゃあ、ポニーテールでいい？」

亜「またあんたが決めんの？まあ、ツインよりはやりやすそうだからいいか」

作「なあ、ハクア。前からアミってなんか俺に対して冷たくないか？」

ハ「あはは・・・」

予感

ムラマサを納める直前、黒獣があたしの方を見たけど、その目に敵意は込められていなかった。

では何だったのか？

それは、あたしには分からなかったけど……。

どうしてだろう？

この子とは、また別の形で会う気がする。

何年後か、何百年後か……もしかしたら何千何万と掛かるかも知れないけど、どこかで。

そんな予感めいた物を感じながら、ムラマサを完全に鞘に収めると同時に黒獣の巨体がぐらりと大きく揺れて、大きな音を立てて倒れた。

程なくして、体がマナとなって世界に還っていく。

そしてそこには黒獣の牙が一本残った。

*

「良かったの？」

「うん。これは大事に持っておきたい」

「そっか」

この牙は黒獣を倒した証明としてギルドに提出しなければならないけど、見せるだけでも報酬を受け取ることはできる。

本来の半分以下になってしまっけど。

だから今回は、銀貨六枚だったのが、三枚になってしまった。

「ハクアこそ良かった？報酬少なくなっちゃって・・・」

「いいっていいって」

「・・・そっか。ありがとう」

「ううん。でも、お姉さんとおじさんは何かあるって思ってるかも知れないね？」

ハクアの言う通り、おじさんとお姉さんは何があったのかをしつこく聞いてきた。

いや、この言い方は少し悪いけど、あの二人は十年間ずっとお世話になってるからね・・・。

あたし達の初めての行動に少し驚いているのかも知れない。

今まで提出をしなかったことなんて無かったかし、少なくともこの街で提出をしなかったのは、あたしが初めてだから、尚更に……。

「そうかもね」

「ねえ、どうして提出しなかったの？理由、あるんだよね？」

『うちも気になります』

『俺もだ。教えてくれねえか？』

「もちろんそのつもり。だけど、まずはお風呂入りたいから、その後でもいい？」

「あ、そうだね……お腹も空いたし」

『そっぴや、もうすぐ陽が落ちるな』

空を見てみると、ムラマサの言う通り空は暗くなっている。

後数十分で、この街にも夜の帷が降りるだろう。

宿に戻って女将さんに挨拶をして、お風呂に入りごはんを食べて部屋のベッドで並んで座る。

「あたし自身、どうして分からないんだけどね？この子とはまた会

うような気がして……」

『この子って……黒獣か?』

「うん。あの子が最期にこっちを見たの、ムラマサ達も見たでしょ?」

「あ、そういえば見てたね?」

『それがなにか?』

なにか、って聞かれたらあたしにも分からないけど……。

「分からないけど……何か予感、みたいな物をね?感じたの」

「予感……アミ、カードを見てみて?」

「え?どうして?」

「いいから」

ハクアに言われて、カードを取り出し表示を出して裏をしてみる。

けど

「何も変わってないよ?」

どこにも変化は無かった。

スキルのレベルが上がった訳でも、新しいスキルが追加された訳でもない。

本当に何も変わってない。

「え？ホントに？」

「うん。ほら」

カードをハクアに渡して確認させる。

「・・・ホントだ」

「ね？何か気になることでもあるの？」

返してもらったカードの表示を消して、しまいながら聞くと、ハクアは新しいスキルが追加されていると思ったといった。

そのスキルの名前は『未来予知』。

文字通り、未来のことを予知するスキルでごく稀に手に入れる人がいるらしい。

でも、まだ誰も手に入れていない様で、殆ど伝説と化しているスキルだとか。

「まあ、いいんじゃない？それに、あたしはそんなスキルいらないよ」

『なんでだよ？先に起こることが分かるんだぜ？』

「だってつまらないし」

『「『え(は)?』』』

三人とも同じ反応を返してきた。

「だってさ・・・もしあたしがそのスキルを、ムラマサとフユズイに会う前に持ってたとしたら、まるで初めから出会うことが決められてたみたいじゃない？初めから決められた出会いなんて、あたしは嫌だな・・・」

折角あえてもそれが、決められていたってことなら、喜びもしないと思う。

「最初から全部知ってたらさ・・・確かに面倒なことや危険なことを避けて生きることができるけど、それはあくまでそういうことが起きるってことが分かるだけで、その先に起こることは分からないんだよ？」

「その先？」

復唱したハクアに頷きで返して、あたしの考えを話す。

「ハクアと初めて出会った時は、スキルなんて物は持って無かったし、たとえ持っていたとしてもあたしにそれを確かめる術は無かった。前にも言ったけど、あの時はハクアに食べられると思ったんだよね・・・」

なことから始まった。いきなり空に放り出されたんだよ？危険ではないって・・・でも、そこでハクアに出会って、そこから全部が始まった」

女将さんとの出会いもお姉さんとの出会いもおじさんとの出会いも。

この着物に、ムラマサとフユズイ。

今日の黒獣。

「大変なこともちろんあったけどさ・・・ハクアたちがいたからね。楽しかった」

もし、あのまま落ちていて、何かの偶然が重なって無事だったとしても、訳も分からないまま終わってたと思う。

一人でこの世界を回るなんて、到底できっこなかっただろう。

「ありがとね？あの時助けてくれて」

「・・・それ、何度も聞いたよ？」

「いいじゃない？本当に感謝してるんだから」

笑いながら言うハクアに、あたしも笑いながら返す。

「ムラマサとフユズイに逢えたことも、本当に嬉しかった。最初は心配し過ぎだな、と思ったけど、それも全部優しさから来てるんだもんね？」

ありがとう。いつも心配してくれて」

抱きしめて、改めてお礼を言う。

これからもムラマサはあたしの心配をするんだろう。

そして、また心配し過ぎだっと思う。

でも、それが優しさだっことを、あたし達は知ってる。

「これからもよろしくね？」

『おう！任せとけ！』

頼もしいパートナー。

着物にも自我があればいいのにな・・・。

そのうち芽生えたりするのかな？

でも、今はこのままでもいいか。

「ハクア達も、これから先もよろしくね？」

「『もちろん(どす)』」

「フフ」

本当に良かった。

あの時、ハクアに出逢えて。

*

ハクア達が眠った後もあたしは少し起きていた。

持っているのは黒獣の牙。

それを両手で包み込んで、胸元に持ってくる。

眠気もあったから、気の所為かも知れないけど牙が少し震えた気がした。

楽しみにしてるからね？

また出逢える日を

予感（後書き）

亜「ハプニングなんか起きてないじゃん」

作「かも知れないって言ったろ？俺だって先のことなんて分からないって」

亜「はあ・・・まあ何もないならそれで良いけどね。それで、ちゃんと黒獣とは逢えるの？」

作「言ったら楽しくないだろ？お前が言ったじゃんか」

亜「・・・それもそっか。楽しみにしてるからね？」

作「・・・心配しなくてもいいさ・・・」

亜「え？何かいった？」

作「いや」

亜「そう？まあ、いいけど。それじゃ、あたしは戻るから」

作「おう。またな？」

亜「ええ」

休日（前書き）

ム『一ヶ月後』

ハ「え？何が？」

フユ『今回は前話から一ヶ月後の話らしいです』

ハ「ああ。それで、何かあるの？」

作「いや、特に何も起きないよ。多分」

ハ「多分って」

ム『またアバウトだな』

作「そういや、アミは？ここにいないの初めてだけど」

ム『ああ。まだ寝てるよ』

作「珍しいな？いつもはもう起きてんのに」

フユ『まあ、ええやないですか。アミはんはうちらの中では一番子どもなんですから』

ム『だな』

休日

黒い小さな犬が夢に出てきて、あたしはその子とじゃれ合っていた。抱き上げると、頬をなめられてくすぐったくて、あたしもおかえしと言わんばかりにその子のお腹を撫でたりして。

夢なのに、とても現実感があって、なんだか不思議だった。

暫くすると、犬が急にそっぽを向いて駆けだしていった。

『あーまってー！』

呼び止めると、犬はチラリとあたしを見て

『ワン！』

と一声吠えて、走り去っていった。

「待ってー！」

「ひゃっー！」

「え？あ、ハクア……」

起きると、誰かの驚く声が聞こえて、見てみるとハクアが髪を整えていた。

おはようと、挨拶するとハクアも返ってきて、どうしたのか聞いてきたけど、あたしも分からなかった。

でも、何か夢を見ていたことは覚えてる。

「最近多いね？飛び起きるの」

確かに……黒獣を倒してから今日までの一ヶ月。

あたしは今日のように飛び起きることがよくある。

「何か心当たり、ある？」

「……多分、夢だと思う」

「夢？」

「うん。内容は覚えてないけど……今日みたいに起きる時は、必ず夢を見てる」

「嫌な夢？」

「ううん。そんな感じはしない」

「そう……それならいいけど」

心配してくれるハクアにお礼を言って、ベッドから降りて洗面台へ向かい、歯磨きと洗顔を済ませる。

「ムラマサ、フユズイ、おはよう」

『おっ』

『おはようございます』

「準備できた？」

「うん」

着物を着て、髪をポニーテールに結び腰にムラマサを提げ、首から黒獣の牙を提げて、着物の下に入れる。

ハクアもホルスターを左足の太股に付けて、フユズイを差し込んで準備完了。

下に降りて、女将さんに挨拶をした後ごはんを食べて、ギルドへ向かう。

「今日はどうする？」

「うん・・・今までしてなかったけど、長期のクエスト受けてみようかな？いい加減他の街も見に行きたいし・・・。いい？」

「うん」

ハクアは二つ返事です承してくれた。

と言うわけで、あたし達は今日初めて長期クエストを受けることになった。

長期クエストって言うのは、他の街までの護衛だったり探索に時間が掛かるエリアでの討伐・採取依頼のことを言うんだけど、これまでの十年間、なんとなく受けられずにいたんだよね……。

本当に何となく……。

「それで、どれ受ける？ラ・メールまでの護衛依頼にル・スイエルでの魔物討伐協力者依頼か……初めてだし、まずは簡単な物で慣れておいた方がいいと思うよ？」

「そうだね……。ル・スイエルの方が近いんだよね？」

「うん。ラ・メールより一ヶ月くらい早く着く」

「じゃ、護衛依頼の方にする。折角遠くまで行くんだから、途中で色々見たいし」

「分かった」

お姉さんの所に紙を持って行って、依頼を受ける手続きを済ませる。

「あら、珍しいわね？あなたたちが長期依頼なんて」

「はい。今まで受けてなかったら受けてみようと思って」

「そう。気を付けるのよ?」

「はい」

お姉さんといつの間にか出てきていたおじさんに手を振って、ギルドを出る。

「出発は明日だから、今日はゆっくりしてようか?」

「うん。そういえば、他にこの依頼を受けた人達ってどんな人なんだろうね?」

「まあ、気にはなるけど、明日になれば分かるからいいんじゃない?」

「それもそっか」

『変な奴がいないといいけどな・・・』

『その時はうちが斬ります』

フユズイが何か物騒なこと言ってたけど、とりあえず気にしないことにした。

休日（後書き）

亜「何も起こらなかったね」

ハ「偶にはいいんじゃない？」

作「そうそう。次話ではやっと他の街に向かうからな」

亜「どんだけ遅いのよ、って感じだけどね・・・」

作「うっせ」

ハ「あはは」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7765y/>

高町亜美の物語

2011年12月6日08時50分発行